瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 13
瑪瑙集 …… 26
紅玉集 …… 28
俳誌交歓 …… 29
4月号月評 …… 30
恵贈句集拝見（31） …… 32
特別作品「ドイツのクリスマス」 …… 34
竹内悦子句集鑑賞 …… 36
共鳴句 …… 38
琥珀集作品鑑賞 …… 41
瑠璃集作品鑑賞 I …… 42
II …… 43
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 44
他誌転載 …… 46
シクラメンのかおり …… 47
戦の国父の蒼天（25） …… 48
諸荒神・宝塚吟行 …… 50
寒の入り …… 52

2011/4　第61号

今月の一句

曲家に捨蚕臭ひておしら神

桂　樟蹊子

（平成元年作）

遠野への旅はご一緒させていただき、いまも懐かしさが離れない。「おしら神」とは蚕の守り神、「曲家」とは馬と共に、同じ屋根の下で生活をしてたころの家の作りの各称である。炉端で聞く語り部の「馬に恋をして昇天した娘」、その代償として授かった蚕を遠野の人達は今も大切に神と崇めている。「捨蚕臭ひて」の措辞が臨場感に溢れている。

隆子

PDF= 俳誌の salon

早春

塩路隆子

春寒の肌に馴染める道後の湯

祖谷渓にすする蕎麦粥春の炉辺

怖けつつ春霜光るかづら橋

春疾風平家印のほつれ旗

峡谷に春雪しまく平家村

内子座の綱の百条冴返る

草餅や当地訛の伊予絣

PDF= 俳誌の salon

四月号光耀抄

塩路　隆子選

きさらぎの波に身を置く番鳥　宮田　香
滝凍てて奥社に捧ぐ幣となり　松岡　和子
水琴窟地下より春の動き出す　鈴木　照子
下戸なれど熱燗欲しやぶり大根　竹内　悦子
軒下の藁に連なり凍豆腐　安本　恵子
しじみ汁社員食堂準備中　藤見佳楠子
バザーとて子に七色の春財布　川崎　利子
大根を包みしクーデターの記事　吉田　希望
斑鳩の仏の涙雪明り　池田加寿子
春めくや座布団赤き無人駅　石川かおり
水餅のゆるりと沈む小甕かな　大松　一枝
耳疎き筈が春雪聡く聞き　小澤　菜美
出国のをさなの喃語春浅き　山口キミコ
きりたんぽ鍋にふつふつ比内鶏　増田　一代
大寒の水に禊の絹豆腐　宮崎左智子
鮎を挿す湖北風情の夫婦舟　中川すみ子
宿木が存在示す冬木立　難波　篤直

PDF= 俳誌の salon

鎮魂の竹灯籠や寒の朝　西垣　順子
「田子の浦ゆ」子が弾きけり歌かるた　新実　貞子
鍋四つ村人四分牡丹鍋　能勢　栄子
春雪の道にもつるる轍跡　坂上　香菜
まほろば線二輛なりけり春疾風　笠井　清佑
笹鳴の疎林日差を集めけり　田中　浅子
産声の君は姫なり寒の月　笹井　康夫
節分会加持する鬼の金目かな　坂根　宏子
梅林の中黒猫とすれ違ふ　塩路　五郎
春泥のここ青山として老いぬ　山本　丈夫
ストーブ列車に弾ける訛するめ焼く　北尾　章郎
ふと亡妻の名を呼びにけり雪催　高谷　栄一
春炬燵嬰に初めてのいないいないばあ　伊藤　憲子
寒紅の口より零れ国なまり　和田森早苗
並列の鮪千体耀初め　阪本　哲弘
春の夢黒縁眼鏡かけしまま　常田　創
嬰児の笑み文字通り福は内　吉波喜久恵
ひとり住む山科の里雪しんしん　杉本　綾
ゆるゆると春動きけり堀の風　松田　洋子
漬物をハートにバレンタインの日　森下　康子

PDF= 俳誌の salon

街灯のシャンデリアめく氷柱かな　和田　郁子
春めくや目鼻整ふ石ぼとけ　前川ユキ子
影絵めく冬木の上に鎌の月　三川美代子
暗闇に白き息吐く千手仏　山崎　里美
母の言ふ日にち薬や春兆し　伊東　和子
湯の町に客を呼び込む猿廻し　伊藤　純子
沖さしてゆく船のあり雪の峰　清水侑久子
冬うらら石部小路で鯛ごはん　鷲見たえ子
春めきて開き直りの老人力　伊庭　玲子
枯葉被て柞は風に鳴るばかり　落合　晃
直立の美少年なりヒヤシンス　飯田美千子
車井に錆びたる滑車冬日差し　五十嵐　勉
岩海苔の香りほのかや波の音　宇治　重郎
古代人の息吹く気配や寒の朝　大島みよし
君子蘭咲く吾が家より子ら巣立つ　大谷　信子
吸取紙花の便りをうつし取る　岡　佳代子
やはらかき炭火の温み芭蕉館　片岡久美子
快方のわが身に優し初湯かな　桂　敦子
春しぐれ京都タワーに夜の帷　紀川　和子
雪降りて時間長者となりにけり　小西　和子

綾取りをせがむ児の手に陽のをどる　小林　久子
漁船のランプに映る雪の里　山本　節子
鳴く亀の上げし頭の微動だに　山本　孝夫
立春と言ふに噴煙天を突き　山崎　真義
大寺の屋根一枚の残り雪　吉田　晴子
膝寄せて何を語らむお籠雛　松田　和子
冬ひと日レトロ・モダンの銀座線　秦　和子
白き身の花開くごとししじみ汁　福本スミ子
真夜中の道玄坂や皮ジャケツ　藤本　秀機
躍り出る赤獅子の舞春を呼び　長濱　順子
けふも雪故郷丹波に兄病みて　西田　史郎
押入れの古書読み疲れ葛湯かな　田中　眞
春光や檳榔椰子のどこまでも　谷口　俊郎
夫逝きて何を描かむ雪の画布　辻　香秀
凛とせる祖母の面影六花かな　辻　知代子
久びさに葱ぬたの味祖母偲ぶ　富田ヒナ江
歩行器の音カタカタと春待つ嬰　三原　利枝
山里の雪しんしんと暮れゆける　伊藤　久江
音絶ゆる母亡き庭や雪催　西岡　裕子

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

小面

松岡　和子

滝凍てて奥社へ捧ぐ幣となり
凍畑の禽と分け合ふ青菜かな
落暉背に千手観音めく冬木
失せ物が雪の下より現れる
いっこうに当らぬ八卦山眠る
冴ゆる夜の小面遥か見つめをり
藁紐の弛び仕上がる干大根

花の形

鈴木　照子

前菜は花の形の春大根
淡雪を窓に豆乳プチケーキ
梅林を描きし画布に日の温み
水琴窟地下より春の動き出す
滑り台に雪だるま凍て無残なる
春立つ日届くネービーランドセル
初音せりもうすぐここが通学路

胼の手に

宮田　香

胼の手に啄木の歌しみじみと
寒波来エプロンパステル色にして
きさらぎの波に身を置く番鳥
老木の纏へる霧氷華やぎて
風花の舞はワルツや朝日なか
冬ざれのど真中ゆくスニーカー
当世は炊飯器の上竈猫

PDF= 俳誌の salon

ぶり大根

竹内　悦子

下戸なれど熱燗欲しやぶり大根
三寒に火の神詣みそぎ橋
凍空やたしかに桜生きてをり
煮凝や今宵ひとりの餉を早く
ノロウィルス治りて先づは粥柱
闘病の友へ綿々寒見舞
雪女郎手持無沙汰に朽木村

凍豆腐

安本　恵子

朝市や籾に埋もれし寒卵
熱燗は夫手作りの竹徳利
五人目にやっと女児てふ寒便り
軒下の藁に連なり凍豆腐
急ぐ娘のミニ訝しむ炬燵猫
「鬼は外」やさしき妻になりました
日脚伸び広く明るき里の空

通し土間

藤見佳楠子

冴え返る京の町家の通し土間
料峭の奥嵯峨巡り羅漢群
千体の羅漢それぞれ春を待つ
薄氷を競ひ踏み行くランドセル
掌に囲ふ亡夫の煙草火仄ぬくし
しじみ汁社員食堂準備中
独身寮無造作に置き紙雛

春財布

川崎　利子

阿修羅像在す薄闇寒の昼
猿沢池に水鳥の声甲高く
北窓を開け隣家より嬰の声
バザーとて子に七色の春財布
全身で頷く母に春の雪
童心に還り軒端の雪だるま
「虞美人草」の歌口遊む冬帽子

PDF= 俳誌の salon

クーデターの記事　吉田　希望

食卓の伏せし頁に葱一片
大根を包みしクーデターの記事
体よりやや距離あけて息白し
白菜や平穏無事の金曜日
ぐいと混ぜる母異なりし寒卵
立春や真っ先に押す「つぎおります」
間取り図や花置くならば右の角

雪の元旦　池田加寿子

あら玉に心のチエンジ苦を楽に
お互ひをいたはる電話小正月
穏やかな雪の元旦神籤引く
風のまの湖北の波に小白鳥
斑鳩の仏の涙雪明り
みほとけの前の正座や悴みて
冬晴の舟に寄り添ひ浮寝鳥

寒戻る　石川かおり

鳥鳴くや枯山水の冬の庭
禅寺の庭モノトーン寒戻る
禅寺の床軋む音戻り寒
冬凪やはるかに望む那智の滝
水仙や入江を眺む湯治宿
春めくや座布団赤き無人駅
真夜中の四重唱や猫の恋

破れ障子　大松　一枝

水餅のゆるりと沈む小甕かな
春炬燵両手に重き広辞苑
破れ障子繕はぬまま風の道
朝寒に気息ととのへ万歩計
暖房に乾きしまなこ子規を閉づ
湯豆腐に思ひ出手繰るふたり住
リハビリへ控へ目に引く寒の紅

PDF= 俳誌の salon

佐保姫

小澤　菜美

耳疎き筈が春雪聡く聞き
「大雪」とさらりと云へる湖北人
佐保姫が今ドラマ化の城跡に
枯葦に沈める茶室湖畔亭
すっぽりと湖国に帷昼霞
陶館の志野盌小振り春浅き
出水野の鶴を愁ふや鳥ウイルス

初富士

山口キミコ

初ショール巻きて仲見世浅草寺
白銀の一段深し関ヶ原
初富士を見むと車窓に目を凝らす
トンネルを抜ければ車窓雪明り
出国のをさなの哺語春浅き
深夜航手を振るをさな春寒く
大寒の冷気ひしひし朝の窓

雪景色

増田　一代

膨みて開花進まぬ冬の菊
喧躁の解体セール春近し
京に住み近年稀な雪景色
寒さ中不在を届け旅の空
在りし日の思ひ新たや阪神忌
尻餅におっかな吃驚雪の道
きりたんぽ鍋にふつふつ比内鶏

絹豆腐

宮崎左智子

雪晴れて無疵の空の広がれる
大寒の水に禊ぎの絹豆腐
マイペース急がば廻る梅の路地
ランプ吊るホットドッグ屋寒の街
大寒や閉ざせしままの部屋ひとつ
梅一輪またいちりんへ褒め言葉
この家に吾が住むかぎり福は内

PDF= 俳誌の salon

鮒を挿す　中川すみ子

前庭に茶花零るる建仁寺
薄氷の解けて輝く金閣寺
屋根の雪下ろす男や年の功
ひと口の味がまた良し蕗の薹
鮒を挿す湖北風情の夫婦舟
故郷の駅名隠す雪の嵩
古文書が出たの出ないの日脚伸ぶ

宿木　難波　篤直

宿木が存在示す冬木立
餌を探す鳩の一群逆とんぼ
参拝の客喜ばす大焚火
元旦や川の流れの止まらず
好天に誘はれ巡る初詣
鮠釣師寒さ厭はず竿を振る
欄干に並び餌を待つ百合鴎

若菜粥　西垣　順子

十六時間かけての帰省年幕るる
囃し唄思ひ出しつつ若菜粥
お年玉あたり良き事ありさうな
粉雪舞ふ通し矢の娘の紺袴
鎮魂の竹灯籠や寒の朝
侘助の寄り添ふ作り水車かな
厳寒に薄くれないの櫻かな（車折神社）

歌かるた　新実　貞子

お互の句を褒め会うて御慶かな
「田子の浦ゆ」子が弾きけり歌かるた
行列のつづく鯛焼神詣
ゆりかもめ餌を啄ばみつホバリング
手袋編む簡略にしてミトン型
吾庭に三体三様雪だるま
「春の海」の琴の初弾き華やげる

PDF= 俳誌の salon

雪

能勢　栄子

けふも雪音沙汰のなき両隣
雪掘れば重みにも耐へ野菜たち
一キロのポストは遠し雪の道
ひとり身の吾れに馴染みしちゃんちゃんこ
友揃ひ炬燵は足の放射状
鍋四つ村人四分牡丹鍋
冬月や歩む漢の千鳥足

女正月

坂上　香菜

ゆったりと白雲春を載せて来し
あかときのほのと茜の梅匂ふ
雑学は俳句の糧や女正月
八軒家通りを飾るチューリップ
春霧に見通し効かず明石の門
春雪の道にもつるる轍跡
のんびりと山の辺の道すみれ草

春疾風

笠井　清佑

笹鳴や締切り迫る吟行記
生きんとて大口の鯉冬の果
まほろば線二輛なりけり春疾風
風花や奈良坂越えの竹送り
恋歌を作る日もありなごり雪
積る雪大仏池を覆ひけり
凍て道に結び直せる靴の紐

餅花

田中　浅子

福笹に見果てぬ夢や千両箱
初恵比須一力茶屋の紅暖簾
餅花に千本格子華やげる
淑々と掛け声和む初蹴鞠
笹鳴の疎林日差を集めけり
骨董の値切り巧みや初弘法
福笹に祓ひ授ける巫女の鈴

PDF= 俳誌の salon

春障子　笹井　康夫

産声の君は姫なり寒の月
撒く豆をキャッチする児の得意顔
賜はりし生命大事や寒の虫
挨拶の声の白さや寒に入り
松風の影踊りゐる春障子
朝靄の比良の雪嶺醒めやらず
日脚伸び鉄橋渡る電車かな

臘梅　坂根　宏子

雪警報解けて故郷へ向ふ道
臘梅や母が白寿を迎へたる
ほろ酔ひの積もる話や女正月
プラン無き新パスポート春隣
節分会加持する鬼の金目かな
春雪に薄化粧せる金閣寺
金閣の光の池に浮寝鳥

春の川　塩路五郎

せせらぎの他は音なし春の川
ふっくらのメタボ気にせぬ寒雀
年の豆八十粒の掌にあふれ
凧揚げて空の神へのご挨拶
梅林の中黒猫とすれ違ふ
剥落の白鳳仏に春日差
小猿背に駈ける猪奥丹波

雛祭　山本　丈夫

その指にとまりたくなる女かな
見下ろせば曲水の郷光満ち
春泥ここ青山(せいざん)として老いぬ
万葉の風ほのとたち桃が郷
うぐひすの谷渡り聞く女坂
暮るるまで子ら遊ぶ声犬ふぐり
訪ふ家の軒端にならぶ菊の苗

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

弘法の水　北尾章郎

ストーブ列車に弾ける訛するめ焼く
無農薬の証しの穴や冬菜売
米寿翁待ち人来ずと初神籤
弘法の水もて効きし風邪薬
鶏無残魂の鎮めの涅槃西風

風花　高谷　栄一

風花の舞の清らや神楽殿
寒鰤の跳ね遅しき豊漁かな
ふと亡妻の名を呼びにけり雪催
法螺の音に勇みたる鬼節分会
立春と云へど名ばかり風疼く

春の夢　伊藤　憲子

雪降る日注射嫌ひの医者通ひ
問診のながながただの風邪といふ
点滴の速度もどかし猫の恋
元気よく絵本の声や雛の前
春炬燵嬰に初めてのいないいないばあ

寒紅　和田森早苗

寒紅の口より零れ国なまり
赤子泣くボーイソプラノ春隣
照れる日の少なきまちに日脚伸ぶ
身の内の鬼に発止と豆を撒く
庭先の琵の薄氷日を弾く

並列　阪本　哲弘

並列の鮪千体耀初め
み佛の肌つややかや蓮枯れて
平積みの古書を漁るや雪催
天國へ昇るここちや羽根蒲団
手袋を脱ぎて触れたる震災碑

PDF= 俳誌の salon

四月号月評

塩路　隆子

月評は殆んど琥珀集から選んで評をしているが今月は五句欄から選び月評を纏めてみた。来月も瑠璃集を中心に月評させて頂く予定をしている。

ふと亡妻の名を呼びにけり雪催　　高谷　栄一

「あとがき」にも書いたが、この度第二句集「嵯峨野」を上梓された高谷さんの句である。長年連れ添われた奥様を失われた悲しみを述べず淡々と「名を呼びにけり」と表現されたのみの中七であるが、その言葉の重さが充分に伝わる句である。今にも雪の降り出しそうな怪しい雲行きの日だから、余計にその思いは深い。妻を亡くした人、夫を亡くした人なれば共通の思い出のある句であろう。心からのご冥福をお祈りしたい。

寒紅の口より零れ国なまり　　和田森早苗

作者は松江のご出身である。正確には松江がどんな訛なのかは把握できないが、テレビで聞く松江出身の元総理、竹下登や、元青木参議院議長など良く似た訛がありこれが松江訛かと認識をした思いがある。同郷の人であれば懐かしさも一入であろう。寒の紅をきりりと引いた麗人の、ふと零れた言葉に説があったという。寒紅の主は作者自身かも知れないが、お国なまりならではの親しさ、愛着を強く感じる句である。

ゆるゆると春動きけり塀の風　　松田　洋子

近江の八幡堀にお住まいの作者である。まるでタイムスリップした八幡堀界隈は今も時代劇のスクリーンに度々登場するようである。また有名な「バームクーヘン」店には若い人達の行列が出来、古い麩屋や赤こんにゃくなどが店先に並ぶなど、新旧相俟った町と記憶している。たしかにゆるゆると町は変貌しているのであろう。作者の見た「春動く」が思い出させてくれた八幡堀の移り変わりつつある風景とが春動くで髣髴とさせる。「塀の風」の止めが効果的である。

街灯のシャンデリアめく氷柱かな　　和田　郁子

６０号では「大樹いま氷柱すだれや陸中路」と坂上香菜さんが詠まれたが、今年の寒さは、記録的な寒さのようで陸奥へ行かずとも「シャンデリアめく氷柱」が見られたようである。夜の街中は真白な設え、その街の外灯からはシャンデリアのように氷柱が下がっているなど極寒の中、作者はまるでシンデレラ気分では・・・。ロケーションのいい作品である。

PDF= 俳誌の salon